

翻訳という世界

〈12〉



船越 隆子

翻訳家

る英語のサイトを覗き、日本語に自動翻訳してみることがある。けれども、肝心の知りたい単語は、英語のまま残されていたりする。

自動翻訳の限界？ 私たち人間の翻訳家に、まだまだ活躍の余地があるというところかな、と少し安心したり…。

自動翻訳機なるものが出てきたのは、もうこれくらい前だろうか。最初は画期的だと思っただけ、そのうちには、まるでコピー機のように、英字の本のページを開けてスキヤンすれば、翻訳された文章が印刷されて出てくる機械ができた。聞き、本当に驚いた。

私たち翻訳家の仕事は、もうなくなってしまうのかしら、とちょっと危惧を感じたりもした。

当初は、翻訳機はそれこそ高価なものだったが、いつの間にかインターネットでは、たいていのポータルサイトは翻訳機能もそなえていて、開いたサイトを一瞬にして翻訳してくれるようになった。ただ、その能力はというと、まだまだ未熟な感がある。しゃくし定規な直訳で、それほど複雑でない英語でも、意味の通らない、へんてこな日本語になってしまふ。

英単語の意味を調べていて、ネットで検索しても日本語訳が見つからない時には、試しにその英単語の載っている

もちろん、技術翻訳など専門用語を使う複雑とした文章の多い分野では、翻訳ソフトも威力を発揮するだろう。また、何人かで分担する場合に、訳語を統一してくれたら、類似する文章が出てきたら教えてくれるような便利に活用できるソフトもある。けれども、それはあくまで翻訳支援ツール。助けてくれる道具であり、機械が「から翻訳して」くれるわけではない。

なぜそんなに機械をライバル視する(笑)かというと、実は、私は英語がそう得意ではない。そう言っと、「またまた謙遜して」と言われそうだが、本当にそうなのだ。昔から、英語がよんでくれる、と言われたことはないし、単語も覚えられない。もちろん受験生の時には、単語カードを作って、それなりに懸命に覚えなければ、大学時代、分からない単語を辞書で調べるときに、あまりに何度も同じ単語を引くの、引いたら印をつけるようにしてることがある。そうしたら、同じ単語

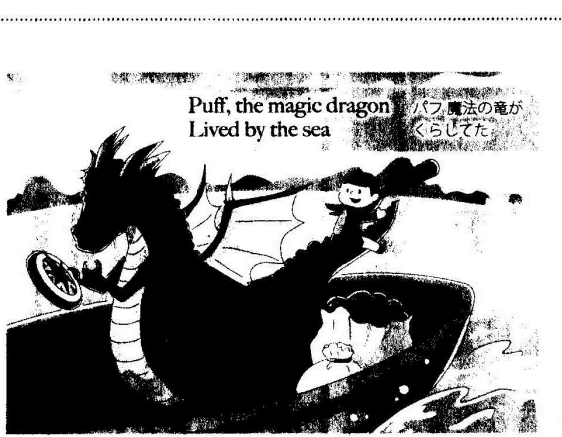
人間の力 大切なのは日本語表現

に何度も印がついて真っ黒になった。

そんな私でも翻訳の仕事ができてくるのは、どうしてだろう。英語から日本語への翻訳の場合、大切なのは結局、日本語なのだと思う。もちろん、英語の解釈をまったく間違えてしまったりは困るが、それよりも、読む人の心が届くような日本語になってこそ、翻訳という作業が生きてくる。

先日、NHKの番組「ようこそ先輩」で、翻訳家の湯泉友季子さんが、子供たちに翻訳とはどういうものかを教えていた。

「I love you」をどう訳すか？ 普通ならば「愛しています」「大好きです」だけれども、夏目漱石



イラスト・山田 あゆみ

「それには、日本語の音の性質をどう訳すか？ 普通ならば「愛しています」「大好きです」だけれども、夏目漱石

これを、「月が奇麗ですね」と訳したんだと紹介していた。まさしく日本語の奥の深さ。「全然違うじゃない。誤訳だよ」と言ってしまうは身も蓋もないけれど、日本では「月が奇麗」で愛が伝わる状況もありうるのだ。これは、翻訳機では絶対に出てこない。

また、最近、歌手の由紀さおりさんの歌が、世界で大ブレイクしている。美しい歌声もさることながら、日本語の響きが、外国の人にとってもどこか懐かしい感じがするらしい。

個人的には「みどりのうろこ」ならして泣いた」の箇所が好きだ。でも、原詩では「His head was bent in sorrow/Green scale s fell like rain」(竜は悲しみに頭を垂れ、緑のうろこは雨のように剥がれ落ちる)で、「うろこをならした」なんて全然言っていない。

読む人の心に届く言葉で

（徳島市在住）